様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 29 日現在

機関番号：10101
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21730611
研究課題名（和文）近代日本における女性の帝国大学進学の実態に関する研究

研究課題名（英文）The Study on the Admission of Women to Imperial Universities in Modern Japan

研究代表者
山本　美穂子（YAMAMOTO MIHOKO）
北海道大学・大学文書館・技術専門職員
研究者番号：70455583

研究成果の概要（和文）：
旧制大学期における帝国大学への女性の進学状況を明らかにするため、1945 年以前に学部学生として女性の入学を受け入れた 5 帝国大学（東北・九州・北海道・大阪・名古屋）の理学部、1 帝国大学（北海道）の農学部、2 帝国大学（東北・九州）の法文学部について、女性入学者を確定した。そして、北海道帝国大学における女性の入学については、出身校別（東京女子高等師範学校、東京女子大学、日本女子大学校）に調査分析を行い、進学動機・進学背景等の実態を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
In this present study, I discovered the full breadth of the woman’s college students who received higher education in Imperial Universities of Tohoku, Kyushu, Hokkaido, Osaka and Nagoya before 1945. In particular, about the students who have entered Hokkaido Imperial University from Tokyo Woman’s Higher Normal School, Tokyo Woman’s Christian University and Japan Women’s University, I deeply analyzed their motive, their educational environment and the background factors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育史、大学史、女子高等教育史、女性の進学

１．研究開始当初の背景

近代日本教育制度において、最高学府である帝国大学に、正規の学生（すなわち学部学生）として入学資格を有する者は、原則として、高等学校高等科・大学予科の卒業者であった。高等学校・大学予科が男子を対象とした高等普通教育機関であることからも明白なように、帝国大学への女性の入学は想定されたものではない。にもかかわらず、1913 年東北帝国大学理科大学への女性 4 名の入学志願を転機に、1918 年北海道帝国大学農科大学への女性 1 名の入学志願を経て、各帝国大学

は1920～1940年代を通じて女性の入学志願者への対処を余儀なくされた。女性の入学志願者に対する入学資格の有無と身分（〔学生〕学部学生、〔生徒〕選科生・聴講生・専攻生）に関する審議は、東京・京都・東北・北海道・九州・大阪・名古屋帝国大学のすべてで展開した。

1913年8月東北帝国大学理科大学に学部学生として3名（黒田チカ、牧田らく、丹下うめ）が入学した後、1920年代には、東北帝国大学（理学部・法文学部）と九州帝国大学（農学部・法文学部）が、「第二次募集」（高等学校卒業生で定員が満たない場合の入試）という限定的な枠組ではあるが、学部規程上で女性の学部学生としての入学を認めた。1930年代に入ると、大阪帝国大学（理学部）、九州帝国大学（理学部）、北海道帝国大学（理学部）が、1940年代に入ると名古屋帝国大学（理学部）が、それぞれの理学部規程で、第二次募集における女性の学部学生としての入学を認めた。

最近の研究（拙稿「北海道帝国大学理学部における女性の入学」『北海道大学大学文書館年報』第1号、18～57頁、2006年）や各大学が編纂した大学沿革史（『名古屋大学五十年史』通史一、1995年など）から、帝国大学への女性入学者数を集計すると、1913～1945年には少なくとも197名の女性が帝国大学に入学している。帝国大学は、近代日本における女性の大学進学問題に一貫して携わってきたといっても過言ではない。

しかしながら、従来、大学沿革史は、帝国大学への女性の進学をめぐって、自校の最初の事例について、大学が審議した結果を概説的に記述するにとどまっていた。女性入学者数も特に1940～45年について不確かな大学が大半であった。

また、男女共学の視点から、大学の共学制度化や女子大学の制度化の史的展開を論じてきた先行研究もあるが、いずれも、考察対象が最初の女性入学志願に対する帝国大学側の施策の記述にとどまっていた。

上記のように、大学沿革史や先行研究は、近代日本における女性の帝国大学進学の全体像と背景には踏み込んでおらず、十分な考察がなし得ていない研究状況を示していた。

２．研究の目的

本研究の目的は、旧制大学期における帝国大学への女性の進学の全体像を描き出すことである。

特に、明らかにすべき課題は、第一に、各帝国大学における女性入学者数である。とりわけ、1945年以前に学部学生として女性を受け入れた学部を有する帝国大学（東北・九州・北海道・大阪・名古屋）については、女性入学者を確定させる。

第二に、上記で確定した女性たちが、帝国大学へ入学した進学動機である。

第三には、帝国大学への進学を支えた経済・家庭環境である。

第四には、出身校（女子高等師範学校・女子専門学校）の教育内容、指導教官の教育実践といった教育環境である。これにより、帝国大学への進学に相応しい学力をどのように獲得し得たのかを浮かび上がらせる。

第五には、女性が入学志願した専攻学科目（数学・物理学・化学・植物学・法文学など）の特徴と背景である。帝国大学側の受入体勢や受入可否の理由も含めて考察するものとする。

以上の5点を基盤に総合的に考察して、近代日本教育史における帝国大学への女性の進学を再考察することで、大学史のみならず女子高等教育史に有意な指標を与え得るものと考えた。

３．研究の方法

（1）1945年以前に学部学生として女性の入学を認めた帝国大学（東北・北海道・九州・大阪・名古屋）、（2）1945年以前は学部学生としての入学は認めずに生徒（聴講生等）として女性を受け入れた帝国大学（東京・京都）、（3）帝国大学へ入学志願者を輩出した女子高等教育機関（女子高等師範学校・女子専門学校）を対象として、大学文書等の一次資料を中心に、現地資料調査を行なった。

（1）及び（2）帝国大学（進学先側）に関する調査について

入学関係・学事年報関係文書を中心に女性入学に関する資料記述を調査した。調査先は、東北大学史料館、東京大学史史料室、大阪大学文書館設置準備室、名古屋大学大学文書資料室・名古屋大学理学部同窓会、九州大学大学文書館、国立国会図書館等である。あわせて、各帝国大学の『大学一覧』・同窓会誌・新聞記事・回想録等の収集にあたり、出身校、入学・在学状況、専攻科目、卒業後の進路などを調査分析した。

（3）女子高等教育機関（出身校側）に関する調査について

教務関係文書を悉皆調査し、帝国大学側の資料と重ね合わせて分析した。その際、帝国大学への入学志願者を多く輩出した東京女子高等師範学校・奈良女子高等師範学校・日本女子大学校・東京女子大学を主として調査した。

調査先は、お茶の水女子大学（東京女子高等師範学校関係文書）、同大学附属図書館・櫻蔭会（櫻蔭会会報等）、奈良女子大学附属図書館（校史関係資料）、東京女子大学附属図書館（東京女子大学同窓会月報等）、大阪

府立大学学術情報センター図書館（大阪府女子専門学校卒業論文）等である。
女子高等教育機関側の教務関係文書については、教務課が作成した文書類に綴られている「大学入学志願者名票」を中心に調べて、入学併願先、志望専攻科目などをまとめた。
また、女子高等教育機関の同窓会組織の機能に着目して、同窓会誌にあたり、帝国大学・文理科大学等の大学進学に係る記述や、大学卒業後に研究者・母校教授となった卒業生の動向に係る記述を収集・分析した。

上記の資料調査と同時に、帝国大学に入学した女性（当事者）と同窓生や家族（関係者）への聴き取り調査を行って、(1)（2）（3）の調査結果を跡付けることとした。

４．研究成果
（1）各帝国大学における女性入学者の確定
1945 年以前に学部学生として女性の入学を受け入れた 5 帝国大学（東北・九州・北海道・大阪・名古屋）の理学部、1 帝国大学（北海道）の農学部、2 帝国大学（東北・九州）の法文学部について、女性入学者名簿の作成を成し遂げた。
女性入学者名簿の作成は、今後の研究において、不可欠な基礎的データである。各帝国大学の進学状況の比較分析を可能にすると共に、大学沿革史の統計資料を改訂し、戦後に新制大学に昇格する女子専門学校・女子高等師範学校の再評価をなし得るデータを構築できた。

（2）帝国大学へ進学者を輩出した女子専門学校・女子高等師範学校の特色
上記の女性入学者名簿の分析により、帝国大学への進学者を多く輩出した女子専門学校（東京女子大学、日本女子大学校）、女子高等師範学校（東京女子高等師範学校）の特色と位置づけについて下記のとおり考察した。
①東京女子大学
1913～45 年にかけて、帝国大学の理学部数学科への進学者総数は 30 名であり、その半数は東京女子大学の生徒であることが判明した。そして、帝国大学の理学部数学科への進学について、東京女子大学数学専攻部の実績が顕著であることが初めて明らかになった。東京女子大学数学専攻部生徒の帝国大学への進学意識の形成には、「数学」の中等教員無試験検定を文部省から 1937 年に許可されるまでに至る、同専攻部の教育内容・教育体制に拠るところが大きいことも明らかになった。
特に、北海道帝国大学理学部数学科では、女性入学者 10 名のうち、5 名が東京女子大学の生徒であり、最多を占めていた。この 5 名については、帝国大学への進学動機、家庭環境、卒業後の進路など、聴き取り調査をふまえてまとめ、小伝的記録を作成した。
②女子高等師範学校
東京・奈良女子高等師範学校から、帝国大学の理学部へは数学科・化学科・物理学科・生物学科・植物学科・動物学科・地質学鉱物学科・地球物理学科への入学者があり、農学部へは水産学科・農学科・農業生物学科への入学があり、法文学部へは文科・法科・経済科への入学者があることが判明した。帝国大学での専攻志望学科をみると、女子専門学校卒業生は一部の学科に志望が偏る一方で、女子高等師範学校卒業生は専攻志望の学科が幅広いという特色が見られた。
具体的にみると、東京・奈良女子高等師範学校から北海道帝国大学へは 1918～1945 年にかけて 9 名の入学者があった。農学部に 3 名（全科選科生 2 名を含む、農学科・農業生物学科・水産学科専攻）、理学部に 6 名（数学科・植物学科・地質学鉱物学科・動物学科専攻）である。東京女子高等師範学校卒業生の 8 名については、小伝的記録を作成した。それにより、1910～20 年代における東京女子高等師範学校理科卒業生の躍進（女性科学者の輩出、学士・博士の誕生、母校教授への就任）や、女子高等師範学校の大学昇格運動の影響などが、帝国大学進学の動機や背景にあることを明らかにした。
また、東京・奈良女子高等師範学校の教務関係文書の調査分析から、東京・広島文理科大学への出願・併願状況も一覧化した。これにより、女子高等師範学校卒業生を規程上で入学資格者として認めた東京・広島文理科大学が開学した 1929 年以降は、他の女子専門学校とは異なり、東京・奈良女子高等師範学校の卒業生は、帝国大学への進学から文理科大学への進学へとシフトすることが判明した
③日本女子大学校
日本女子大学校は、東北帝国大学（理学部・法文学部）、九州帝国大学（法文学部）、北海道帝国大学（理学部）、名古屋帝国大学（理学部）へと、各大学へ広く進学者を輩出していることが明らかになった。
具体的にみると、北海道帝国大学理学部では、女性入学者 23 名のうち、8 名が日本女子大学校の生徒で最多を占めた。この 8 名について、出身課程（日本女子大学校高等学部理科、日本女子大学校師範家政学部・家政学部第二類）別に分析を試み、聴き取り調査をふまえて、小伝的記録を作成した。これにより、日本女子大学校出身者における帝国大学進学意識の形成には、日本女子大学校の女子総合大学開設へ向けたカリキュラム改革と大学昇格頓挫、高学歴な家庭環境、1910～20 年代における卒業生の躍進等が複合的に影響

を及ぼしていることが明らかになった。
　そして、帝国大学への女性進学の嚆矢である1913年東北帝国大学理科大学に入学した3名を第一世代とするならば、1930～40年代にかけて北海道帝国大学に入学した日本女子大学校卒業生たちは、1920年代に帝国大学へ進学した後に母校で教鞭を執った第二世代（酒井十代：1923年東北帝国大学理学部入学者・日本女子大学校教授など）に後進として育てられた第三世代にあたることが明らかになった。

（3）今後の展望
　本研究では、1945年以前に学部学生として女性を受け入れた5帝国大学の進学実態を概括した上で、北海道帝国大学を中心に取り上げて、3 女子高等教育機関（東京女子大学・日本女子大学校・東京女子高等師範学校）の帝国大学への進学実態と背景について分析した。今後は、さらに、他の帝国大学・女子高等教育機関についても、その分析結果を発表していく必要がある。
　また、本研究では、理系学部（理学部・農学部）の検討が主となったため、法文学部の検討も今後進めていく必要がある。
　また、本研究の過程で、研究テーマを深めることとなる下記項目の関連資料も収集し得た。
① 大学進学にみる女子高等師範学校研究科の位置づけの検討
② 帝国大学医学部における女子医学専門学校生徒の専攻生としての進学実態
③ 戦後改革期・新制大学設置直後における旧制女子教育機関（高等女学校・女子専門学校・女子高等師範学校）出身者の大学進学実態
　今後も引き続き、帝国大学・女子高等教育機関の歴史的な位置づけを幅広く考察していく展望である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）
①山本美穂子、北海道帝国大学へ進学した東京女子大学生たち、北海道大学大学文書館年報、第5号、76-103、2010、査読無
②山本美穂子、北海道帝国大学へ進学した東京女子高等師範学校卒業生たち、北海道大学大学文書館年報、第 6 号、53-70、2011、査読無
③山本美穂子、北海道帝国大学理学部へ進学した日本女子大学校卒業生たち、北海道大学大学文書館年報、第 7 号、42-58、2012、査読無

〔その他〕
ホームページ等
http://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/publication.html

６．研究組織
(1)研究代表者
　山本　美穂子（YAMAMOTO MIHOKO）
　北海道大学・大学文書館・技術専門職員
　研究者番号：70455583

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：